

# 「ホストとゲスト」から「観光の場へ集う人びと」へ —カトマンズの観光市場、タメルで宝飾業に従事する小売商人を事例に—

渡 部 瑞 希

## はじめに

従来の観光研究では、近代的生活を営む人びとが観光へ赴く要因を、労働者階級の大衆化および近代的疎外から説明する傾向にあった[MacCannell 1976(2012)]。近代的人間は、かつての伝統社会において彼自身であった仕事や隣人、町や家族に対して失った愛着や真正性を探し求めて、伝統社会を体現しているかのように見える観光の場へ赴くのである。

本稿で問題としたいのは、観光の場へ赴く主体を近代的人間であるツーリストに限定し、ホストを観光地周辺地域に根付いた土着民として、または「伝統文化の担い手」として描いてきたことである。無論、ホストを「伝統文化の担い手」として描くことが不適切だと言いたいのではない。そのように一義的に描くことは、ホストとしてツーリストをもてなす人びとの微細な生活実態を見過ごす可能性があるのである。そこでまずは、観光人類学分野において、ホストとゲストの関係がどのように論じられてきたかを概説し、その問題点を浮き彫りにしたい。

「ホストとゲスト」という関係に最初に言及したのはヴァーレン・スミスである。彼の編著、『ホスト&ゲスト』には、観光開発におけるホスト社会の文化的変容や経済的インパクト、ゲストの旅の動機や経験の多様化、ホストとゲストの相互関係に関する論考が含まれている(スミス 1991)。

この著書が発行されて以降、観光人類学の分野において、ホストとゲストの関係は、「帝国主義」の文脈で論じられる傾向にあった(江口 1998)。これにより、「植民者／被植民者」「西欧／非西欧」「先進国／途上国」「搾取者／被搾取者」「まなざす者／まなざされる者」という権力関係がホストとゲストの関係を再生産・強化していったのである(太田 2001)。

たとえば太田は、文化を構築する担い手として沖縄の観光の目玉である「ウミンチュ体験コース」をとりあげ、ホストが観光文化を操作・構築している様子を論じている。太田は、観光客が、漁民の潜水技術や料理の腕、物怖じしない態度、陽気さ、明るさ、やさしさを評価することで、漁民が自己の仕事に誇りと自信をもち観光客より高みにたつ過程を論じている(太田 2001)。

このように近年の観光人類学はホストとゲストの関係を客体的かつ構築主義的に論じることで文化構築に携わるホスト社会のさまざまな実践を明らかにしてきた。しかし、本稿を通じて詳細に論じるように、カトマンズの観光市場に集う人びとを、ホストとゲストという関係で論じることには限界がある。カトマンズの観光市場、タメルには、ツーリストとして何度もネパールにやってきた外国人が、カトマンズでツーリスト向けのレストランやホテル、土産物屋を開くことが珍しくない。彼らはネパール人でもな

く現地住民でもないが「ゲスト」から脱却して「ゲスト」をもてなす立場に転じたり、外国人であることを利用して時に彼ら自身も「ゲスト」になることもある。

このような状況を鑑みれば、グローバル化が進む中で、観光の場に移動する主体をツーリストにのみ限定するのは不十分である。アーリが示すように、「いまや人びとは、より遠くへ、より早く、(そして少なくとも)より頻繁に旅するようになって」おり、自分で望んで旅をしている人も多くいるが、そうせざるを得ない人(亡命者、難民、強制移民)もまた急増している(アーリ 2015)。このように「グローバル社会を移動する人びと」という観点に立てば、観光の場へ移動する人びとをツーリストのみに限定するのではなく、彼らをもてなすホストをも移動の対象に加える必要がある。その上で、従来の分析枠組みである「ホストとゲスト」を再検討することが本稿の目的である。

上述の目的を達成するために、本稿では、カトマンズの観光市場、タメルの宝飾商売を事例とし、ホストとゲストの区分けが曖昧になりつつある現状を民族誌的データに基づき提示する。その上で、ホストとゲストという二者関係ではなく「観光の場に集う人びと」として、さまざまなアクターを主眼に置いた観光分析の必要性を主張する。

## 1 調査対象とフィールドワークの概要

### (1) フィールドワークと調査対象者の概要

本稿で用いるデータは、2006年 8 月～2009年 12 月の間で断続的に行った約15ヶ月のフィールドワークに基づく。

2006年度の最初の調査では、タメルの宝飾店(148店舗)を対象に、宝飾商人の社会的背景(出自、民族、カースト、宗教構成)や店舗経営状況について量的調査を行った。またそれと並行

して、2006～2009年の調査期間に、タメルで宝飾店(K店)を営むインド系ムスリムの店主(兄＝シャーズ、弟＝ハッシム)のもとで従業員として働きながら、タメルの宝飾店で働く小売商人のコミュニティに入り、彼らのライフヒストリーについてインタビューを行った。

2006年の量的調査において、タメルの小売商人は、ネパール人(Nepali)、インド人(Indian)、チベット人(Tibetan)という枠組みで認識されていた。小売店主の出自は、ネパール(54.0%)、インド(25.7%)、チベット(17.6%)、その他(2.7%)であり、ネパール商人のほとんどはヒンドゥー教徒と仏教徒で構成されていた。また、チベット商人のうち76.9%、インド商人のうち92.1%はイスラム教徒であった。以下の表1は、量的調査で得られた小売商人(店舗を経営する店主)の出自・宗教・民族(カースト)を示すものである。

まず、ネパール商人のうち「ネワール族」は、カトマンズの先住民族であり、筆者の調査においても、2名を除いてすべてがカトマンズ出身者であった。つまり、ネパール商人の半数以上が、ネパールの地方都市や山岳地帯の出身者である。次に、インド商人は、ネパールに同化せず、ネパールとインドを行き来する人びとである。タメルには単身者が多く、家族はインドに残している者が大半である。最後に、チベット商人は、カシミール(ラダック)出身者がほとんどであり、仏教徒も若干数いるが、彼らはいずれも、1950年代の中国動乱を経験した難民ではなく、新たな経済的機会を求めてタメルに市場参入した者である。彼らは家族をカトマンズに呼び寄せネパールで生活するも、ネパールへの帰属意識は低く、しばしばカシミールやラダックへ帰郷する。

このように、彼らは、従来の観光研究が想定するような、現地の伝統文化の担い手としてのホストではない。彼らは、自身のアイデンティ

「ホストとゲスト」から「観光の場へ集う人びと」へ

表1 タメルの宝飾店の小売店主の出自・民族・宗教構成

ネパール商人の社会的背景と店舗数		
社会範疇	民族・カースト	店舗数
ネワール族	サキヤ	12
	バジュラチャルヤ	4
	サヒ	6
	シュレスタ	5
	マナングール	3
	トゥタダール	2
	ジョシ	1
	シン	1
	アサルバディ	1
	シルワル	1
	パニヤ	1
	ネバリ	1
パルパティ・ヒンドゥー	ブラーマン	5
	チェットリ	11
	スナール	6
チベット系	マナング	9
	タカリー	1
	タマン	1
ムスリム		5
その他		4
合計		80

インド商人の社会的背景と店舗数		
宗教	出身	店舗数
ムスリム	ジャイプール	32
	アグラ	3
ヒンドゥー	カジュラホ	1
	デリー	1
	バンガローブ	1
合計		38

チベット商人の社会的背景と店舗数		
宗教	出身	店舗数
ムスリム	カシミール(ラダック)	20
仏教	チベット	6
合計		26

- ・2006年、タメルの宝飾店、148店舗を対象として調査
- ・148店舗中、4店舗が回答を拒否
- ・ネワール続のサキヤ、バジュラチャルヤ、パルパティ・ヒンドゥーのスナールは、金銀細工職工カースト集団

ティを故郷に強く保持しながら、経済目的のために、「ネパールの思い出の品」をツーリストに売る移民商人である。

## (2) 調査対象地、タメルの概要

本節では、本論が対象とするタメルの特徴を明記する。まずは、タメルが発展する以前に開発されたジョチェンと呼ばれる地区の発展経緯を概説しよう。

ネパールの鎖国が解かれた1951年以降、ネパールの観光産業はインドやアメリカ開発援助によって発展した。それに伴いネパールを訪れるツーリスト数も年々増加していったが(Chand 2000: 5)、そうしたツーリストの中でもヒッピーと呼ばれる人びとが、ジョチェンと

いう地区(地図中④のエリア)に集うようになったとされる。

1960年代、1970年代、ジョチェンには、大麻が吸える欧米風のカフェや、ネパール料理やチベット料理が食べられるレストラン、低料金のロッジが増えていった(Liechty 2005: 23、Chand 2000: 69)。「ジョチェン」とはカトマンズの先住民族であるネワール族の言語で示された地名であり、英語では「フリーク・ストリート」と呼ばれている(森本 2000: 90)。レクティの報告では、ジョチェンでヒッピーをもてなすロッジやレストラン業をはじめたのは、この区域に土地をもつネワール族の商人と、この区域に逃れた一部のチベット難民であった(Liechty 2005)。

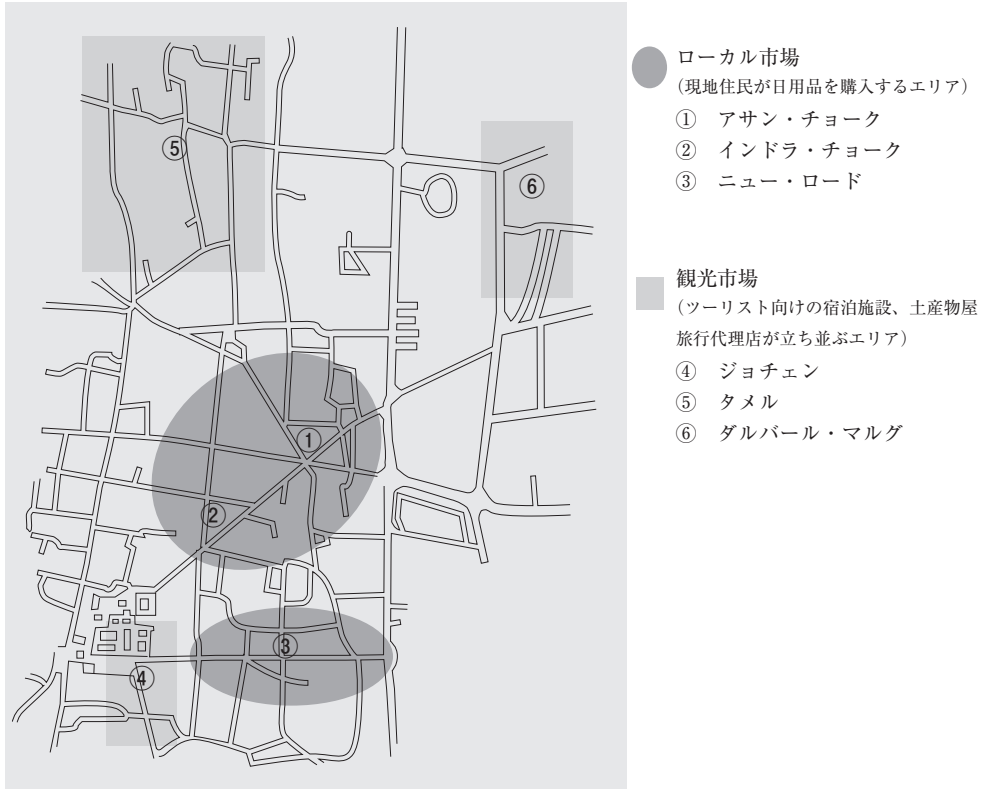


図1 タメル周辺の観光市場とローカル市場の地図

しかし、1973年、ネパール政府は、大麻や怠慢なヒッピーによる悪いイメージを払拭するために、ドラッグ全般を非合法にしてヒッピーの入国を禁止した。そのため、ジョチェンは1970年代後半あたりから衰退し(Liechty 2005: 25)。ジョチェンから少し離れたダルバール・マルグとタメルが、急増するツーリストを受け入れる宿泊エリアとして開拓された(地図中⑤、⑥のエリア)。

ダルバール・マルグは、現在、短期滞在のツアー客や、裕福層のツーリストのためのファイブ・スターホテルや高級レストラン、ブランド品店が立ち並び、カトマンズ市場で最も「近代的な市場」である。この市場でツーリストを顧客とする店舗を営んでいる商人の多くが資本力のあるインド人である(Upreti 1999)。

一方、タメルはダルバール・マルグとは対照的に、個人旅行者や登山家、長期滞在者を受け入れる「ツーリスト・エリア」として発展していった。

タメルの第一の特徴は、ネパールの自由経済化が促進した1990年以降、ネパールの地方都市や周辺諸国から多くの移民商人がタメルに市場参入したことである。1990年当初、タメルで土産物屋を営む小売店主の多くが、インド商人であり(鹿野 2002: 90)、筆者の現地調査では、カシミールやラダック地方出身のチベット商人が急増したのもこの時期である。鹿野の記録によれば、こうした移民商人が営む店は、「間口も広くディスプレイも垢抜けていて、品揃えも豊富であったため、ネパール商人は、資本力にしても商売のセンスにしても、これらの移民

商人には太刀打ちできない様子であった」という(鹿野 2002: 90)。しかし、ネパール商人も手をこまねているばかりではなく、旅行代理店やホテル、レストラン、トレッキング用品店、ネパールの伝統工芸品を売る土産物店などの事業を展開していった。

タメルの第二の特徴は、以前、ネパール観光に来たツーリストがホストとして、ツーリストをもてなすビジネスを展開する場である点である。たとえばタメルでは、ドイツ人が経営するベーカリー、日本人が経営するレストランやカフェ、韓国人が経営する韓国料理屋、イスラエル人が経営する服屋、中国人が経営するホテルが繁盛していた。つまり、タメルに急増するツーリストをもてなすホストが、以前はツーリストであった外国人であることも珍しくない。筆者の知る限り、こうしたツーリストは、タメルにより長く滞在するために、タメルでのビジネスに着手している。タメルで店舗を持つために、彼らはネパール人から手助けしてもらい、ネパール人を雇い入れることも積極的に行う。外国人である店舗経営者自ら、タメルを訪れたツーリストをもてなすが、資金繰りに困ったりすれば、自分の国へ一旦帰り、短期のアルバイトをしては、タメルでの生活や商売に必要な軍資金を持ち帰る。

このように、タメルは「ツーリスト・エリア」として知られながらも、外国人が住まい、商売をするような国際色豊かな市場として発展を続けている。

## 2 政治的・経済的移動要因

以上で概説したように、タメルの宝飾商売のフィールドには、移民商人(インド系ムスリム、チベット系ムスリム)と現地商人(ネパールが多様な民族カースト集団)が参入していた。本節では、前者の移民商人がどのような経緯でタメ

ルに移動してくるのかを明らかにする。そのために留意すべき点は二つある。①小売商人の移動要因が、ツーリストのように、近代的生活や公的な領域によって失われた伝統や真正なる何かを観光の場で探し求めるわけではないこと[マキヤーネル 1976(2012)]。②しかし、小売商人の多くは、タメルで観光業をはじめる外国人のように、余暇活動を目的としてタメルへ赴くことである。

本節では、①の移動要因について(1)政治的要因と(2)経済的要因に分けて説明する。なお、本節で用いるのは、筆者が現地で収集した小売商人自身の歴史語りによるものである。

### (1) 政治的要因

インドと中国、チベットに囲まれた内陸国ネパールは、周辺国の紛争や動乱によって行き場を失った難民やその家族を積極的に受け入れてきた。1959年のチベット動乱であふれ返ったチベット難民の一部を受け入れたのもネパールである。また、カシミール地方の主権をめぐるインド、中国、パキスタンの紛争によって、治安に不安をおぼえる人びとが次々とネパールに流入した。

筆者が小売商人にインタビューする限り、これらの紛争や動乱の直接の避難民は見当たらなかった。しかし、紛争や動乱の間接的な影響(治安悪化への不安、それに伴う経済機会の減少)から、タメルでの商売を決断する小売商人は少なからずいた。以下で示すイルファン(ジャイプール出身のインド系ムスリムでタメルの宝飾店の店主)の語りは、その事実を物語っている。

【エピソード①：イルファンの語り(2007年時24歳、インドのジャイプール出身)】

私の父(ウディン)とそのパートナー(ヤシン)は、印パ戦争から逃れてカトマンズで新しいビ

ジネス・チャンスを得ようとしていた。彼らは列車に乗り、ボストンバッグにあるだけの宝石を入れて、カトマンズにやってきたそう(1980年ごろ)。

彼らは最初、ジョチェンで行商していた。彼らはツーリストにたくさんの宝石を売り、カネをつくった。彼らは行商ではなくジョチェンで店をもとうと思ったが、それはできなかった。ジョチェンはネワール族がすむ居住エリアだったし、そこで商売できるのはネワール族だったからだ。彼らは、私の父がたくさんの宝石を売ってカネ儲けしていることを妬んだのだろう。彼らは、当時何もないタメルに父を追いやったのさ。でも、今ではどうだろう。ジョチェンよりもタメルにたくさんのツーリストが来る。彼らは今では、タメルで成功しているわれわれを妬んでいるのだ。

イルファンの父(ウディン)とそのパートナーであるヤシンは、宝石売りをはじめめる以前、家業の羊飼いをしていたという。しかし、印パ戦争の最中に、飼っていた羊は減少し家業は縮小してしまった。当時、新たな商売をインドではじめめることはできず、生活が困窮してしまったため、ウディンとヤシンは協力して宝石を集め、カトマンズの観光市場という新天地に賭けたのである。

また、筆者が働いていたK店の店主、ハッシムは、彼がまだ幼かったころの印パ戦争の悲惨さを語り、そのことがインドを離れる要因になったことを語ってくれた(1980年代)。

【エピソード②:ハッシムの語り(2007年時27歳、インドのアグラ出身)】

部屋の中を暗くして、家族で身を寄せ合ってじっとしていた。外では爆撃の音が聞こえていた。人びとの悲鳴も聞こえた。あれはとても怖

い夜だった。一晩あけて外に出てみると、人がたくさん死んでいた。そんな日が何日か続いた。

僕の父は政治家だったが、紛争当時は、家族みんながとても貧しい暮らしを強いられていた。食べるものもほとんどなかった。あの時はとても苦しかった。

それで、僕の一番上の兄が、インドで靴の工場をはじめたんだ。父は政治家だったが、政治家っていうのはカネをばら撒くばかりで、ちっとも儲からない。その時、兄さんはもう22歳だったし、商売をはじめめることで、家族を養おうと考えたんだろう。父の政治力のおかげで資金も集まり、はじめのうちは順調だったんだ。

でも、工場がもう少しで出来上がるって言うときに、兄さんは事故死してしまった。いや、事故死で片付けられたけど、僕は、兄さんは誰かに殺されたと思っている。なぜかって？父の影響だと思う。父がインドとパキスタンの紛争に関わる仕事をしていたから、誰かに恨まれていたに違いない。

当時の父の落胆振りといったらなかった。長男を失ったのだから。精神的ショックで、父が兄の代わりに靴の工場を経営することはとてもできなかった。次男のシャーズは、まだ14歳、僕は11歳、弟のラメシュは9歳で、兄の代わりに商売をするには兄弟誰もが幼すぎた。もちろん、靴の工場はつぶれてしまった。次男のシャーズは当時、学校へ通っていたが、学校をやめてホテルで働くことで家族を養うことになった。

それから父は少しずつ回復したが、シャーズや僕にインドで商売させようとはしなかった。インドで商売をすれば、兄さんのようにいつかきつと殺されてしまうだろうから。だから僕たちは、タメルにいる。

以上のハッシムの語りから明らかなことは、シャーズやハッシム、その家族が、長男の死を

事故死ではなく印パ戦争と間接的に結びつけ、そのことが、インドではなくネパールでの商売を決定付けたことである。このように、移民としてタメルの宝飾商売に参入する小売商人の中には、家族の生活を守り自らの生き残りをかけるといふ切迫した状況に置かれて、タメルの市場に参入してきた者もいる。

## (2) 経済的要因

二つ目の経済的要因は、政治的要因と重なるものの、それとは独立したものとしても捉えうる。しかし、経済的要因とは、単に、新たな経済的機会を得る、より豊かな生活を志すことのみを指し示すわけではない。経済的要因は、既存の社会的紐帯に基づく道德経済(モラル・エコノミー)との関連で読み解く必要がある。これを明確にするために、経済人類学分野で論じられてきた、モラル・エコノミーと資本主義経済の狭間に立たされる「商人のジレンマ」を参考しよう。

ポランニーとその流れを汲む実体主義者が「社会に埋め込まれた経済」という視点を導入して以来、すべての人間が経済合理性に従って行動するわけではないことは経済人類学者のみならず、多くの社会学者にも共有されている(ポランニー 1975)。こうした視座をふまえる一つの議論に、市場の競争原理に従って富を牛耳る経済ではなく、コミュニティ内部の生存維持と互酬性による富の再配分に着目したモラル・エコノミーがあげられる(Hyden 1983)。しかし、これら親族やコミュニティ成員、同郷人同士の道德的義務に縛られた商人は、自身の生計維持の必要性に則した道德的に適した価格でしか売れないために十分に儲けることはできない。そのため、商人は、親族や同郷人との社会的紐帯を回避しながら、資本主義経済下において「見知らぬ他者」と、自由競争に基づく市場取引を

しようとする。このように、既存の社会的紐帯による道德的義務と、「見知らぬ他者」との自由な市場取引の狭間に立たされることを、エヴァースらは「商人のジレンマ」と呼ぶ(Evers 1994)。

タメルの宝飾店で働く小売商人の中にも、「商人のジレンマ」を抱えながらも、ツーリストという「見知らぬ他者」との自由な市場取引で儲ける者もいる。以下で示す2つのエピソードは、小売商人が「商人のジレンマ」を抱えてタメルに参入していることを示すものである。

### 【エピソード③:バンティの語り(2007年時29歳、インドのアグラ出身)】

(注:バンティは、シャーズとハッシムの従兄弟にあたり、このエピソードで登場するタンジンは、彼らの叔父である)

僕の叔父のタンジンは、10歳の頃から、タージ・マハールでツーリスト相手のガイドをしながらカネを稼いでいた。当時からタンジンは商売の才覚があり、ガイドをしてかなり儲けたそう。しかし、10歳の子どもの稼ぎは、すぐさま両親にとられてしまい、彼の自由になるカネはほとんどなかったそう。

1990年、タンジンは19歳になっていた。彼はそろそろタージ・マハールのガイドをやめて、タメルでツーリスト相手に宝飾商売をしようと考えた。この商売の方がもっと儲かるだろうと思ったし、タメルで稼いだカネの一部をインドの家族に送りさえすれば、残りの儲けは自分の自由になると考えたからだ。そう、タンジンは、自由が欲しかったんだよ。

タンジンの予想は的中し、彼はタメルで大成功を収めた。現在、彼は、タメルに3店舗、ダルバール・マルグに1店舗、タイのバンコクで原石の卸売業もしている。

【エピソード④：アヌバルの語り(2009年時35歳、インドのジャイプール出身)】

(注：アヌバルはジャイプール出身のインド系ムスリムである。彼らの親族のほとんどが宝飾商売に従事し、カトマンズでは有力な商人の一人である)

私の祖先は、カルカッタで宝飾商売をしていたが、八代目(1960年ごろ～)がマナンギ<sup>(1)</sup>(ネパールの民族集団の一つで、ヒマラヤ交易民)と宝石の売買をはじめた。カトマンズにきたのはマナンギからカネをとりたてたためだった。マナンギはなかなかカネを支払わず、八代目はカトマンズに滞在する期間が長くなってしまった。その後、九代目(アヌバルの父)が、カトマンズの観光市場に目をつけて、タメルに滞在するようになった。最初は、マナンギの支払いを待つための、片手間の商売だったのが、ツーリスト相手の方が儲かることに気がついた。マナンギとの取引はすべて信用取引だが、ツーリストの支払いは現金払いだ。それに、マナンギには卸売価格で売らなければならないが、ツーリストには小売価格で売る。おかげで九代目は、カトマンズの滞在が長くなっても、マナンギの支払いを待つことができたのだ。

九代目は、その後もマナンギとの取引を続けたが、私は(十代目)マナンギとは一切の取引を止めた。だからといって、私はネパール人すべてと取引を止めたわけではない。ネパール人の顧客から得られる利益は、ツーリストのそれとは比べものにならないほど少ないが、彼らと取引を続けることは、カトマンズで安定的な商売を営む上で必要不可欠だ(たとえば、ネパールでトラブルに巻き込まれたときに、インド人はネパール人の有力な知り合いがいることで、トラブルを回避できたりする)。

以上で示した2つのエピソードは、タメルへ

移動する経済的要因が、親族関係や道徳的義務に縛られた取引関係を保持しつつ、これらの社会関係では得られないような大きな経済利益を得ることを指し示している。

### 3 商売をはじめめる契機としての観光

前節で取り上げた移民商人がタメルに市場参入した1970年代、1980年代、タメルは現在ののような華やかな国際的な市場ではなかった。とりわけ、1970年代、タメルの開発はまだ進んでおらず、小売商人の中には、「タメルは昔、ただのジャングルだった」と回想する者もいる。そのジャングルのような荒野を、現在のような市場に発展させたのは、政治的要因や経済的要因によってタメルに移動した、ウディンやヤシン(エピソード①)、タンジン(エピソード③)、アヌバルの祖先たち(エピソード④)であった。

これら先人の移民商人がタメルに市場参入した後の1990年以降、ネパールの自由経済化により、タメルには国内外からより多くの移民商人が流入し、先に述べたように、ネパールを気に入りリピーターとなったツーリストが観光業に従事する場として発展した。

筆者が現地調査をしていた頃から現在に至るまで、タメルは、ツーリストだけでなく、観光業に従事するホスト、タメル周辺に住むネパール人にとっても、エキゾチックな異空間を形成している。そのため、政治的・経済的要因で移動してきた移民商人が、逼迫した生活環境から脱するためにタメルでの商売に賭けた状況とは異なり、これら先人の跡を継ぐ第二、第三の移民商人は、最初、タメルで働く意志が明確にあるかないかに関わらず、観光目的でカトマンズで商売をする親族を訪れている。

以下で取り上げる4名は、1990年代にタメルに参入し、筆者が現地調査を行った2006年、2007年当時も、タメルの宝飾店で働いていた小

売商人である。

【エピソード⑤：タヘッドの語り（2009年時27歳、インドのファティクシークリ出身）】

タヘッドがカトマンズにきたのは7歳のころである。当時インドにいた彼は、カトマンズに出稼ぎにいく叔父が、いい服をきておいしいものを食べている姿をみて羨ましく思っていた。自分も叔父のようにになりたいと思ったタヘッドは、叔父にお願いしてカトマンズに遊びにいった。

最初は、「働く」「お金を稼ぐ」という意思はなく、彼は数ヶ月の間、インドにはない高いビルやきらびやかなネオンを見ながら町を歩いて楽しんでいた。「カトマンズにきた当初は、何もかもが真新しく、刺激的で、夢の世界にいると思った」とタヘッドは語った。そのうち、彼は、カトマンズに売っている真新しい服が欲しいと思うようになり、叔父に相談をしたところ、叔父は「宝石を観光客に売ってカネをつくれればいい」といった。そこでタヘッドは路上に出て観光客にネックレスを売り歩くようになり、遊び歩く生活から次第にビジネスを覚え始めていった。

タヘッドにとって、宝石の行商をしながら観光客と話すことは、仕事というよりも刺激的で楽しいことであった。インドでの生活は退屈であったために、インドには戻らず、叔父のもとで生活するようになった。2012年時には叔父から独立し、タメルに店を構えるまでになった。

【エピソード⑥：ハッシムの語り（2006年時26歳、アグラ出身）】

ハッシムは1997年にネパールにやってきた。それ以前に、叔父のタンジンや兄のシャーズがすでにタメルで商売をしていたため、大学卒業

と同時に彼らのビジネスに加わるつもりだったという。それは、兄のシャーズを助けたいという思いと、シャーズから「ネパールは楽しいところだ」と聞いていたためである。

まず、ハッシムがネパールにやってきた当初、彼はネパールの観光名所をみてまわったという。シャーズのいうように、ネパールが楽しいところであれば、そのまま仕事をはじめ、ネパールが合わなければインドに帰ることも考えていた。

ハッシムは、2週間ほどカトマンズで遊び、ポカラ（ネパールの観光名所）での観光を楽しんだ後に、叔父や兄の店にはいかず、友人の店で見習いとして働きはじめた。その後、ネパールを旅行することはできていないが、彼は仕事が終わった後に、ディスコにいったりカジノにいったりショッピングを楽しんだり、観光客と同じような娯楽を楽しんでいる。

【エピソード⑦：アルジャンの語り（2007年時20歳、ジャイプール出身）】

アルジャンは16歳の時、すでにタメルで仕事をしていた兄たちから「将来カトマンズでいっしょに商売をしよう」と誘われた。当時、まだ学生だった彼は、とりあえず学校の休みを利用して兄たちに会いにカトマンズに行くことにした。その時、彼は仕事らしいことを何もせず、兄の店に遊びに行ったりカトマンズを満喫したり、ポカラなどの観光地にもいった。その後、4年間、アルジャンは兄のもとへ数回、観光客として遊びにいった。20歳になった時に、彼はようやく兄の商売を手伝うためにタメルで仕事をはじめた。

アルジャンは、16歳のころ、タメルで仕事をするべきかどうか悩んでいたという。しかし、タメルがとても楽しいところで、インドにはない娯楽がたくさんあり、カネ儲けもできると考

え、タメルでの仕事を決めたという。

【エピソード⑧:アミールの語り(2007年時32歳、チベット系ムスリム、カシミール出身)】

彼がカトマンズに最初に来たのは1992年であった。当時、彼は、タメルで仕事をするとはまったく考えておらず、単にネパールを旅行しようと思ったという。すでに兄家族がカトマンズに滞在していたこともあり、兄の家に泊まったり親戚に会ったりしながら2ヶ月を過ごした。

2ヶ月の休暇の後、彼はインドの親戚のもとを訪れた。当時、彼はインドで医療の勉強をする予定でそのための準備をするつもりだったのである。その準備の矢先、彼の兄が刺繍のビジネスをジュエリーに変えたいから商売を手伝ってくれともちかけた。アミールは、しばらく考えさせてほしいといい、その後、何度かカトマンズの兄の家を訪れた。彼の滞在期間は回を追うごとに長くなり、気付いた時には兄といっしょに商売をはじめていたという。アミールは、「当時、インドで医者になるよりも、タメルでツーリスト相手の商売をしていた方が刺激的だった」と語った。

タヘッドがやってきた当初、カネを稼ぐためというよりもむしろ、叔父から話をきくカトマンズに強い憧れを抱いてやってきたといえる。タヘッドの甥も、同じようにタヘッドを訪ねてカトマンズに行きたいとねだるのだと言う。

以上、タメルで働くことになった4人の経緯から、彼らはそれぞれ、「カトマンズへの憧れ」から仕事へ(タヘッド)、「仕事をはじめる前のひとときの休暇」から仕事へ(ハッシム)、「カトマンズの旅行」から仕事へ(アルジャンとアミール)というように、本格的に仕事をはじ

めるまえに、カトマンズを見て回り、旅して、そこに滞在し続けることの楽しみを見出した「ツーリスト」のような存在であったといえる。

## おわりに

本稿では、グローバル社会を移動する人びとという観点から、観光の場へ赴く人びとを、ツーリストに限定することなく、ホスト自身の移動経緯を追う必要性を論じてきた。そのために、タメルの市場発展の歴史から、主に印パ戦争を経験したインド商人の移動要因として、政治的・経済的要因を明らかにしながら、近年の傾向として、ネパールでの観光を経て、商売をはじめる小売商人の実態を明らかにした。その限りにおいて、これらの小売商人がタメルで商売をはじめめる契機は、「余暇労働」として、ネパールと自身の国を行ったり来たりする、外国人ツーリスト(外国人ホスト)のそれと重なる。

このように、外国人ツーリストがタメルでレストランやホテルをはじめると同様、当初は「ツーリスト」の立場にあった者が、意図的／非意図的にタメルで商売をすることになるケース、すなわち「ゲスト」が「ホスト」や商売人の側に変じるケースは珍しいことではない。こうした外国人の商売人は、「外国人」として新しくきたツーリストをもてなし、カトマンズの観光名所を彼らに教え、案内することがある。このことから、タメルでは、観光人類学分野が焦点を当ててきた「ホストとゲスト」、現地の人々を指す「ホスト社会」を設定することは難しくなってくる。タメルに集うひとびとは誰しも「ホスト」または「ゲスト」「ツーリスト」または「ビジネスマン」の間を行き来する可能性があるからである。

こうしたホストとゲストの偏在性ゆえに、本稿では、従来の観光人類学が関心対象としてきた「ホストとゲスト」という分析枠組みではな

く、観光の場に集う人びととして、観光研究を進めていく必要があると考える。

【注】

- (1) マナンギとは、ヒマラヤ交易民の一民族集団である。彼らは1960年代よりネパール政府からパスポートを得る権利を得て、ヒマラヤから南アジア、東南アジアに渡り、幅広く商売を行っていたとされる(Clint 2004: 135)。彼らの中には、安価なジュエリーをインドで仕入れ、ビルマでそれらを売り、半貴石を仕入れ、タイでそれらを売り絹の服や既製服をネパールで売るということを行っていた(Clint 2004: 138)。アヌバールの語りにおけるマナンギとは、こうした経緯で、カトマンズで商売をしていた者だと考えられる。

【参考文献】

- アーリ、ジョン  
2015 『モビリティーズ—移動の社会学』 吉原直樹、伊藤嘉高訳、作品者。
- Chand, Diwaker.  
2000 Nepal's Tourism Uncensored Facts. Pilgrims Publish.
- Clint, Rogers  
2004 Explaining Disparate Economic Success in Highland Nepal: Opportunity Cooperation and Entrepreneurship in *Manang*. *Contributions to Nepalese Studies*. 31 (1) : 115-185.
- 江口清信  
1998 『観光と権力—カリブ海地域社会の観光現象』 多賀出版。
- Evers, Hans-Dieter  
2004 The Trader's Dilemma : a Theory of the Social Transformation of Markets and Society. In *The Moral Economy of Trade : Ethnicity and Developing Markets*. Evers, Hans-Dieter and Schrader Haiko (eds.), pp. 7-14. London: Routledge.
- 鹿野勝彦  
2002 「ヒマラヤの国の課題—登山と大衆観光」『ネパール』 石井博編 pp.85-101. 河出書房新社。
- Hyden, Goran  
1983 No shortcuts to progress : African development management in perspective. University of California Press.
- Liechty, Mark  
2005 Building the Road to Kathmandu: Notes on the History of Tourism in Nepal. *HIMALAYA: The Journal of the Association for Nepal and Himalayan Studies*.
- MacCannell, D.  
1976 (2012) *The Tourist: a New Theory of the Leisure Class*, Schocken Books. (『ザ・ツーリスト—高度近代社会の構造分析』 安村克己・須藤廣・高橋雄一郎・堀野正人・遠藤英樹・寺岡伸悟訳、学分社)。
- 森本泉  
2012 『ネパールにおけるツーリズム空間の創出—カトマンドゥから描く地域像』 古今書院。
- 太田好信  
2001 『トランスポジションの思想—文化人類学の再想』 世界思想社。
- ボランニー、カール  
1975 『大転換: 市場社会の形成と崩壊』 吉沢英成、野口健彦、長尾史郎、杉村芳美訳。
- スミス、バーレン  
1991 『観光・リゾート開発の人類学—ホスト&ゲスト論でみる地域文化の対応』 三村浩史監訳、勁草書房。
- Upreti, Bhuwan.  
1999 *Indians in Nepal: A Study of Indian Miration to Kathmandu*. Kakinga Publications.
- 渡部瑞希  
2016 「取引関係のリスクとその対処としての『公然の秘密』に関する考察—カトマンズの観光市場、タメルの宝飾商人の取引関係を事例に」『文化人類学』 81(1) : 62-79。